

【I】

雷鳴が轟く。

雨は激しく枯れ木を打ち、不吉なカラスがこの世を呪うが如く叫び声を上げる。

鼠色の群衆は、木彫り聖母のお守りを手に持ち、今か今かと言葉を待ち構えている。

ああ！ 預言者よ！

その数珠に埋もれるが如し老婆は、今まさに世界のありようを変えようとしているのだ。

言葉とは罪である。

神聖なものを愚衆にすらわかりやすく格下げしてしまう。

「しかと聞け、群衆よ」

老婆の重たい口が開き、灰色たちに一気に緊張が走る。

「汝らの行いに創造の神はたいへんお怒りである。汝らが汗水足らして働かず、怠惰を貪り、木の根のみを赤子に与えていることは、創造主には全てお見通しである」

「そんな！」

痩せこけた長身の男が、ふと口を挟んだ。

「どうすればよいと？ ああ創造主よ！ わたしたちは空腹のなか毎日毎日、自分が生きのびるだけでも精一杯だというのに！ ああ、なんて無情なこととございましょうか！ 木の根ですら豪華な食事というありさまでございますよ。われわれはそれよりもっとひどい、糞尿のようなものでかろうじて生き残っているのですから！」

「だまらっしゃい！」

老婆はサタンの形相だ。

「いいか、汝らがそのように文句ばかり言っておると…
…」

老婆は気が付かなかった。

この時、鼠色の群衆の中に、「言われた言葉をすべて現実にする存在、『ロウマン』」が紛れ込んでいたということ

を。
「大地は枯れ、木々は死に、空から悪の大魔王が降ってくるであろう！」

するとその瞬間、鼠色の足元の地面は急速にひび割れ、木々は灰塵に帰し、割れた空から巨大なサタンが現れた。そして、ロウマンは消えた。

「ああ、もうおしまいだ！ ずいぶんとお早い終末でございますね！ ああ救い主よ！ どうかわれらをお救いください！」

「あ……」

預言者は申し訳なさそうに切り出した。

「実は今のはただの脅しで、『あんたたちはよく働いてるが、いつ何が起こるか分からんから油断せず引き続き頑張ってくれ』というのが汝らへのメッセージで……」

「でも、預言者さま。あの空を覆う真っ赤なサタンをご覧ください。あなたの預言はすべて現実になっておりますよ」

灰色のシスターが言った。

「もうおしまいじゃ。創造主は本当にお怒りになってしまった。すまんのう、預言を的中させてしまつて。本当は、預言なんて文字通りの意味はないんだが……」
こうして世界がまた滅びた。

【II】

ロウマンは悩んだ。

悩みに悩んだ。

数々の世界を悪意なく破壊してきた彼だが、ここにきて人間のわからなさに絶望を感じはじめていた。

「なぜ文字通りの意味が意味をなくすのか」

人間はわからない。

彼は思った。

人は「最高」といいながら「最悪」といい、「絶対にやらない」といいながらその実行動は矛盾している。「お祈りいたします」というメッセージを送っておきながら、まったく相手に祈りを捧げていない。

わからない。人間はなぜ文字通りの意味をなくすのか。

なぜそのようなめんどくさいことをするのか。

ロウマンには全く理解ができなかった。

そこで、彼は思った。

「文字通りの意味しか存在しない世界では、何が起ころう？」

ロウマンは久々に好奇心を感じている自分に驚いた。

彼は再び新たな世界へと降り立つ。

「今度こそは世界を破壊するまい」と心に誓って。

【Ⅲ】

「つまらねえものですが受け取ってください」

「いえいえまったくつまらなくはねえですぜ！　こんなモンは天竺のはるか先に行こうともぜってえに手に入りやあしませんよ！　ありがたく頂戴いたしましたっせ！」

「いやあ大官どの！　お調子がよろしいことで！　お陰さまで我々の商売も大繁盛ですよ！　ささ、つまらねえ店ですがどうぞお入りください！　江戸から仕入れたとんでもねえナマモノが集まっておりますぜ！」

「あんたなんか、キライ！」

「おいどうしたんでいお駒ちゃん。さっきはあんなに楽しそうにしてたのによお」

「キライったらキライ！　キライよ！　もう！」

「いやあ、そんなに惚れてたんかいおいどんのこと」

「キライ！」

「おいどんも大好きでごわす」

ロウマンは絶望した。

この木造建築にまみれた火事に脆弱すぎる平坦な都市

は、あまりにも「意味が違う言葉」に溢れていた。

この調子でうかつに人前に現れては、また世界を壊しかねない。そこでロウマンはこう呟いた。

「会話をするときには、文字通りの意味のみで行え」

刹那、世界は変わった。

「これ最高なお土産で、わざわざおいらが買ったものなので絶対に受け取ってください！ 断ったら切腹してもらいます」

「いやあそんな押し付けがましく来られても最悪だなあ。まあ一応受け取るけど、もう二度とアンタからはもらいたくねえなあ。まあ一応もらいますが」

「いやあ大官どの！ あなた様が私から賄賂を受け取ってくれたおかげで商売は大繁盛ですよ！ ただくまあ、他の同業者からは白い目で見られてるとは思いますがね、それでも自分だけが得すれば最高でございますんで、いやはや。ぜひとも大量に銭を使って、女どもとたくさん遊んでくださいえ。あつしはそのお金でまたあなたに賄賂を渡し、そして儲けますんで」

「あんた大好き！」

「いやあそんなに直接的にいわれると少し気持ち悪いでござすな」

「大好きだから大好き！ 大好き！」

『『大好きだから大好き』はA||Aの同語反復、トートロジーでござすなあ。すごく頭が悪そうですな。おいどん頭の弱いおなごはお断りでごわす。なんせ地元のとつちやんとかつちやんから『才女と縁組をし、我が一族の地位を上げよ』と言われているもんですからなあ」

ロウマンは安心した。みんなが本音で話す世界。なにも意味の広がりがなく、言葉を安心して使える世界。彼はかくしてユートピアを手に入れた、かのように思えた。

実際この「本音のみの会話」が始まってみると、大きなトラブルが続出するようになった。

傷害、不倫、殺人沙汰が横行するようになったのである。それもそのはず、本来ならば包み隠してあえて言わないでおくであろうことを、みんながみんな全てを口に出してしまうのだから。ロウマンの理想が実現されたこの世界では、人は「最悪」を「最悪」で伝え、「最高」を「最高」で伝える。

かくしてこの世界では人間同士の大きな争いが起こり、全員が誰かに殺されることとなった。最後の一人は、恋人を刺したあとに自らの頸動脈を切ったという。真白の雪に飛び散る朱。

こうして、世界がまた一つ滅びた。

【IV】

ロウマンは再び悩みに悩んだ。

「ことば」とは何だ。全てを正確に記述するものでもなく、かといって正確に記述するときに使われることもある。

これでは存在自体が矛盾ではないか。

正確でいて、同時に正確ではない。

「ことば」とは、一体なんなのだ。

ロウマンは、永遠にこの問いに悩まされ続けなければならぬ。これは、万能であることの代償なのだろうか。

【V】

「君を心から愛してる」

「私もよ」

クリスマスの光とジープの車列を背に、二人は抱き合った。

「私のどこが好き？」

「全部さ」